

チヤヂヤン麺で韓国に根付く

青友坊。韓国大邱市隣近の小都市慶山にある小さな中国料理の店「華僑」による「本當の中華料理店」である。インタビュード日、筆者にこの店の主人を紹介してくれた嶺南大学の朴賢洙教授も同席した。その理由は、じつはこの店の名物であるチヤヂヤン麺を食べたかったからだ。チヤヂヤン麺はチユンチヤンという黒味噌を入れて炒めた具をかけた麺である。中国のザーザンミエン(炸醬麵)に由来をもち、中国人の口に合うように改良された韓国の代表的な庶民食である。

青友坊の主人である王樹清さんは今年七十歳。台灣出身の妻の陳翠梅さん、長男の慶龍さん夫婦と小学校に通う二人の孫たちと一緒に住んでいる。青友坊は徹底した家族経営体制で運営され、厨房の仕事は奥さんと長男の担当、長男のお嫁さんはホールやカウンターの仕事をしている。王さん自身は総監督だが、店が忙しいときは配達を手伝う。

王さんの父親は中国山東省から一九二〇年代に朝鮮半島へ移住した。王さんは韓国生まれの二世である。王さん夫婦の三人の息子は、同居している長男のほかに漢医師の次男と三男である。韓国で漢医師は高所得で誰もが羨望する職業だ。王さんは、息子たちが地元の漢医大で漢医師資格を得て、台湾で一年間鍼灸術を習得

「単一民族国家」のなかで 華僑として生きていること

劉明基(ユ・ミヨンギ)

韓国・慶北大学校教授

外国人として生きる

した「正統」な漢方医であることに大きな自負心を感じている。

王さん一家や王さんの四人の兄弟姉妹の家族が集まるのは祖先への祭祀、旧正月と秋夕(旧盆)などの韓国の名節日だ。王さんはこのような家族の集まりをとても大事に思っている。王さんがキリスト教に改宗しない理由のひとつもこのためだ。クリスマスチャイムとして教会の活動に参加すれば、教会の幅がずっと広くなり商売に役に立つだろとは思う。でもクリスマスチャイムには祖先祭祀ができない。王さんはクリスマスチャイムとして教会に出ることで商売の利益を上げるよりは、祖上祭祀をつうじて一家が集まる機会をもつことがもつと大切なことだと思っている。

華僑の苦難

韓国の華僑は数々の苦難を経験しながら今まで生き残ってきた。彼らの歴史は一八八二年、朝鮮内乱の鎮圧のため清の軍隊にしたがつて来た商人集団によって始まつた。現在約二万人を数える韓国華僑の生活は朝鮮半島の政治的状況に大きな影響を受けてきた。朝鮮半島が分断された後、韓国が反共政策をとったため中國山東省出身が大部分である華僑たちも台湾国籍をもつようになつた。また、韓国政府は華僑に対して非同化政策をとり、韓国籍への帰化を難しくした。

韓国生活の生きがい

王さんもほかの華僑らと同じく、韓国に暮しながら「外国人」として多くの差別を受けた。しかしそれはもうむかしのこと忘れない、何よりもここでチヤヂヤン麺を売つて、子どもたちに大学教育を受けさせることができたからそれで満足だと言う。

日常生活のなかで、彼は自分が韓国人だと思つてゐる。国籍取得の手続きがとても複雑なため、王さんの国籍は依然として台湾だが、彼の韓国への思いは韓国人以上かもしれない。次男のお嫁さんは韓国人で、王さんは彼女が両班の出身だと誇りに思つてゐる。韓国の国家有功者やお年寄りを大切にする王さんは、近所の国家有功者支援施設などからは、料金

の三〇パーセントくらいを割引して注文を受けている。

友人も華僑よりは韓国人が多く、社交の舞台は地域の商工人の集まりだ。現在も慶山国際口岸ターミナルクラブの創立メンバーとしても活発に活動しており、ロータリーをつうじて、貧しい人びとを助けたり、奨学金を支援するなどの社会奉仕活動をおこなうことに、大きなやりがいを感じている。王さんの自宅のリビングには、いちばんよく見える場所に奉仕活動で受けた数十個の感謝牌や功労牌が誇らしく陳列されている。

変わる韓国の華僑政策

「韓国－チヤイナタウンのない世界で唯一の国。もっとも強靭な生活力をもつ華僑たちも根付くことができずには去らなければならない国」。

以前は韓国人たちが誇りにしたフレーズだ。しかし、最近は韓国社会の閉鎖的な「单一民族意識」に反省をうながす意味でよく使われるようになった。今日の韓国社会で「華僑」ということはグローバリゼーションの激流のなかで、韓国がいかに多文化・多民族共生の社会を作れるのかを論ずる象徴的なことばになつてきている。



店の前景



王さん夫婦



三男の漢医大卒業式で
息子の学士帽をかぶる
王さんの奥さん



夫婦はこの厨房でチヤヂヤン麺を作ってきた



社会奉仕活動で受けた
さまざまな感謝牌を
誇らしく見せてくれる王さん

韓国政府は一九六〇年代から外国人の土地所有制限と重課税政策を実施したので華僑は財産権行使や就職の際、大変な思いをした。それによって彼らは海外に再移住するか、あるいは小資本と家族労働力で運営できる中華料理店を開くなど、業種をかえることを余儀なくされた。その結果、一九六〇年代末には華僑人口の70パーセントが飲食業に従事するようになつた。しかし華僑から料理の技術を学んだ韓国人たちの進出によつて、華僑たちの「中華料理店」は激減し、現在は探すのが難しいほどになつてしまつた。